



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	商店街とまちおこし ”これまで”と”これから” : 観光まちづくりにおける「交流」の意味を考える
Author(s)	山村, 高淑; 松本, 真治
Description	第一部: 第6回観光創造フォーラムの記録. 添付資料6
Relation	次世代まちおこしとツーリズム : 鷺宮町・幸手市に見る商店街振興の未来 = Community Development and Tourism for the Next Generation
Citation	CATS 叢書, 4, 84-84
Issue Date	2010-03-20
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42928">https://hdl.handle.net/2115/42928</a>
Rights	© 2010 山村高淑、松本真治
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS04_015.pdf



## 【資料6】商店街とまちおこし “これまで”と“これから”

～観光まちづくりにおける「交流」の意味を考える～

山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター）

松本真治（鷺宮町商工会）

「観光まちづくり」すなわち「観光」を通じた「まちづくり・まちおこし」を考える際に、最も重要な論点のひとつは、観光を通じた様々な主体間の「交流」を如何に「まちづくり・まちおこし」に結び付けていくか、という点にあります。

これまでの「観光まちづくり」の議論においては、旅行者に訪れてもらう空間整備や地域住民によるお宝探しなど、地域資源の開発（発掘・整備）について論じられることがほとんどでした。しかしこうしたアプローチでは、既存の地域資源が多い地域や新たな開発に投資ができる経済的余裕の高い地域が圧倒的に有利になり、本来まちおこし・むらおこしが必要な地方中小都市や農山漁村は、具体的効果をあげられないことが多いのが実際のところなのです。

こうした実情を踏まえ、と、「観光まちづくり」の論点を「資源開発」から人中心の「交流開発」にシフトすることで、今後のまちおこし・むらおこしの議論の可能性は大いに広がるのではないのでしょうか。つまり、これからの「観光まちづくり」が志向すべきなのは、従来型の「消費する旅（買う・見る快樂）」でも「体験する旅（経験する楽しみ）」でもなく、「交流する旅（交流する喜び）」である、ということを経験し、地方から発信し、大きな意義があると考えています。

では、「観光まちづくり」における「交流」とは、具体的にどのような方向性を目指すべきでしょうか。ただ単に、挨拶を交わしたり、買い物をしたり、同じ空間に居合わせたりすることで十分でしょうか。長野県大町市の取り組みや、鷺宮町・幸手市の取り組みから私たちが学ぶことができるのは、人と人が何かを共有することで、アニメのファンが地域のファンになっていったプロセスがまちおこしにとって非常に重要だったという点です。つまり、

※ある場所において、「誰と」「何を」「どのように」共有していくのか

※そして、そうすることで、「如何にまちのファンになってもらえるのか」

が、「交流」を如何に「まちづくり・まちおこし」に結び付けるかのポイントとなるのではないのでしょうか。